

恋愛名歌集

萩原朔太郎

新潮文庫



れん あい めい か しゅう
恋 愛 名 歌 集



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 197 B

昭和二十九年八月五日 発行
昭和四十二年十二月十日 十三刷改版
昭和五十二年七月三十日 二十八刷

著 者 萩 原 朔 太 郎
はぎ わら き た ろう

発 行 者 佐 藤 亮 一
さとう りやういち

発 行 所 株式 新 潮 社
しんせいしゃ

郵便 番 号 一六二
東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 業 務 部 (〇三)(二六六)五一一
編 集 部 (〇三)(二六六)五四二
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

恋 愛 名 歌 集

萩原朔太郎著

新 潮 社 版

684

目次

序言

解題一般

本文

万葉集……………一七

古今集……………五

六代歌集……………八

新古今集……………一〇五

我が愛する者よ。我等田舎にくだり、山里
に宿らむ。恋茄^{こひなす}かぐはしき香氣に発ち、もろ
もろの佳き果物、古き新しき、共に我が戸の
上にあり。われこれを汝^{なんぢ}の為に貯へたり。

雅歌 第七章自十一至十三節

総論

万葉集に就いて……………一五三

奈良朝歌風と平安朝歌風……………一五九

古今集に就いて……………一七三

六代集と歌道盛衰史概観……………一七九

新古今集に就いて……………一八三

序 言

世界のあらゆる文学中で、日本の和歌は最も特殊の存在である。第一に先ず、それは起源的に特殊である。なぜなら西洋や支那に於て、芸術的な韻文は多く叙事詩から発生し、次に遅れて抒情詩が生れるのに、日本では叙事詩と言う文学が発生しないで、最初から純粹抒情詩の和歌が生れた。（この特殊な事情は、もちろん国語の關係によるのである。日本語の韻律は柔軟で不規則であり、叙事詩の如きがッしりした建築的韻文の構成に適しない。（拙著「詩の原理」参照）こうした特殊の抒情詩は、見方によっては最も素朴な文学であり、未だ眞の芸術詩が発達しない以前に於ける、原始の單純な牧歌とも見られるだろう。然るにそんなものでなく、万葉集等の歌は極めて高級な芸術であり、洗煉された文化的表現を尽している故、この方の見地で見れば、或は短詩形の尖端を行く、世界の最も進歩した抒情詩とも言えるであろう。

要するに日本の歌は、日本語の特殊な性質——實際それは世界的に特殊である——と關聯して、他国に類のない韻文である。したがってその芸術価値も独自であり、西洋の抒情詩等と優劣を比論し得ない。けれども他の日本語詩との比較に於ては、すくなくとも韻律構成の上に於て、歌が最も発達した神経を有している。本書の選歌評釈にも述べてる通り、古来の名歌と呼ばれる者が、いかに微妙な音楽を構成すべく、柔軟自由の不定則韻——それが日本語の特質である——

を踏んでるかを見よ。この点で過去の長歌・今様、及び明治の新体詩等の者は、その単調な同一律の反覆から、いたずらに読者を退屈させるのみであつて、何等複雑の神経を持たない韻文である。さらに現時の所謂自由詩に至つては、殆んど詩としての音楽要素が絶無であり、正直に言つて一種の「行わけ散文」にしか過ぎないのだろう。

それ故に見よ。これ等すべての韻文は廃つてしまった。即ち長歌、今様は過去に亡び、新体詩また廃れ、そして最後の所謂自由詩は、今やその曖昧な韻文意識を抛擲して、自ら散文に解体しようとして勉めている。時は惨酷な批判者であり、すべての存在する事物の上に、淘汰を嚴重にするからである。然るに独り、歌だけが昔から不易であり、今日に至つて尚廃らず、永久の生命を持つてゐるのは何故だろうか。けだし日本語の韻文として、過去現在のすべてを通じ、他にこれに換る者が無いからである。換言すれば日本語として、歌が構成し得る最上の韻文である。

一つの本能的な事実として、詩は韻律と共に発生し、かつ韻律を求めて表現する。詩の概念定義は如何にもあれ、それが人を陶醉させる実の力は、主としてその文学に特有している、言語の魔力的な抑揚や節奏——それが広義の韻律である——に係っている。この音楽から来る不思議の酔いが、それ自ら「詩」と呼ばれる不思議な感情である故に、詩と韻律とは同字義であり、広義の韻文であることなしに、詩である文学は無いわけである。然るに今日の日本に於ては、退屈な新体詩等を除いて、歌以外に一も真の韻文が無いのであるから、歌のみが唯一の現在する詩形である。我々の選択はこの点で決定されてゐる。諸君にして若し詩を求め、真の韻律的な詩的陶醉を欲するならば、結局して伝統の和歌を読む外はない。若しそれに不満であつたら、他は外国語の

詩に行くのみである。外国語の詩は——西洋の詩でも支那の詩でも——すべて複雑な韻律で構成され、声調の美しい魅力に富んでる。

とはいえ現代の詩形として、歌は多くの不満感を吾人にあたえる。明白に言つて、吾人は歌の形式に不足であり、どこかに時代思潮との避けがたいギャップを感じる。来るべき未来の詩壇は、当然過去の歌を破壊し、別の新しい韻文形式を造るだろう。(それ故にこそ、著者の如きも、今日歌を作らないで、未来詩形への建設的捨石たる自由詩等を、自ら意識して書いてるわけだ。)現代は過渡期であり、正に日本文化の大破壊時代である。むしろ今日の詩人の仕事は、創造でなくして破壊の方面にあるかも知れない。だがそれだけ時代は悩み、心の荒寥とした空虚感から、過去の完成した美と芸術にあこがれている。とりわけ現代の過渡期詩壇——ああ！そこには何物もない。——にとって、この憧憬は一層深く、昔の美しく完成した抒情詩が懐かしまれる。げに我々の詩人にとって、歌は美と芸術への恨めしき懷古である。

こうした詩人としての立場からして、著者はこの名歌選集を編纂した。他人のための出版ではなく、主として著者自身のための編纂であり、今日の韻文空白時代に於て、多少でも自分の渴情を医やすところの、日常愛吟の古歌を集めた。とはいえこの種の選集として、多少自ら誇る所がないでもない。著者は所謂歌人でもなく、また勿論歌学者でもないけれども、歌を一個の抒情詩として鑑賞する立場の上で、決して彼等の歌壇人に劣るとは思っていない。のみならず著者は、今日の歌壇に対して慚なからぬ不満を持つてゐる。遠慮がちに言つて今の歌壇は、決して歌の正統な道を歩いていない。すくなくとも或る本質の点に於て、彼等は歌の精神を踏み外しており、か

う。つ偏狭固陋ころうの妄見もうけんに捉とらわれている。局外者たる著者の強味は、この点で一の修整を説くである。

西曆一九三〇年春

著者

解題 一般

歌が最も栄えたのは、上古から鎌倉時代の初期までである。この間に万葉集を始めとして、古今集、後選集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、千載集、新古今集等の名勅選歌集が版行され、日本歌史上の精華を悉く尽してしまった。特にこれ等の中、万葉集、古今集、新古今集の三者は有名であり、日本古典の三大名歌集と呼ばれている。本書の選歌は主としてこの三歌集から取っているが、他の六代歌集からも、概観的に極めて少数の秀歌を選んだ。

明治以後の復興歌壇は、歴史上に於ても空前の盛観を呈している。それで始めは以上の外に、明治以来の現代歌選を編入しようと思つたけれども、文献が広汎に渡って散佚しており、選歌の基本とすべき者がないので止めてしまった。昔はたいいてい半世紀毎に、政府（朝廷）の命令で勅撰歌集が編纂された。明治以来既に半世紀を経ている今日、当然新日本歌集の編纂があるべきである。

選歌は六代集を別として、万葉集最も多く、新古今集これに次ぎ、古今集最もすくない。この比準は一に原本の総歌集と、一に内容実質の価値によつたのである。

この書は「恋愛名歌集」と題するけれども、必ずしも恋愛歌ばかりでなく、他の種類の名歌をも所々に編入している。故に標題を正しく言えば、「恋愛及びその他の名歌集」の意味なのである。但し巻中の大部分は恋愛歌で、他は極めて少数の選にすぎない。何故にかく恋愛歌を主題にして、他を編外的に選歌したか？ けだしそれには必然の事情があるのだ。

万葉集二十巻、その中七割を占めるのが恋愛歌である。故に万葉集は、それ自ら一の「恋愛名歌集」と言うべきで、全巻の歌を普通の比例で選んで行っても、恋歌⁷に対する他が3の割合にしかならないのである。次に古今集、新古今集等の歌集になると、恋歌が全体の四十パーセントに減じて来るが、巻末の総論にも書いてる通り、古今集以後の歌では恋歌だけが生命であり、他の叙景歌や羈旅歌等に見るべき作が極めてすくない。故に実質としての比例で言えば、やはり選の大部分を恋愛歌が占めてしまう。

かく古来の歌集を通じて、恋愛歌が常にその中心であり、かつ実質的にも特に秀^{すぐ}れているのは何故だろうか？ けだし恋愛は感情中の感情であり、人間情緒の最も強い高熱であるからして、抒情詩に於ける最も調子の高い者は、常に必ず恋愛詩に限られている。即ち恋愛詩は抒情詩のエスプリであり、言わば「抒情詩の中の抒情詩」である。然るに日本の歌は純粹の短篇抒情詩である故に、常にどの時代の歌集に於ても、恋愛歌が中枢機能となってるのは自然である。恋愛歌以外の者——風物歌や、叙景歌や、羈旅歌や——は、實際言つて和歌の傍系にすぎないだろう。自然発生的の経路で言えば、和歌の本脈は恋愛歌である。したがって「日本名歌選集」は、それ自ら「恋愛名歌選集」に外ならない。

本書の編纂は、始め単に歌だけを選集して、ポケット用の愛吟歌集にしようと思った。評釈や評論の如き蛇足^{だそく}は、一切入れる気がなかったのである。然るに種々の事情からして、編纂の方針が変つて来た為^{ため}、巻末に各歌集の評論を附し、本文の歌にも簡単な註釈を書くことにした。しかし著者の真目的は、もとより愛吟歌集の編纂に存する故、註釈は出来るだけ簡潔にした。もし一の歌について、字義や出所の詳細な解説を要求する読者があれば、よろしく既に刊行されてる歌書に就いて、専門学者の研究を聞くべきである。著者はそうした学者でもなく、かつその種の詮索^{せんさく}に興味を持たない。著者の古歌に求めるところは、詩としての鑑賞的情趣を汲^くむに過ぎないのである。故に本書の評釈は、この点での暗示と手引のみを主眼にした。

評釈は万葉集に粗略であつて、古今集以下の歌にやや丁寧である。これ今日の読者にとって、万葉の歌が比較的親しみ易く解り好いのに、古今以下の歌が却つて難解で親しみ難い^{にく}と思われるからである。

集中数多^{あまた}の歌について、特に韻律の構成を詳しく図解評釈した。前に序言で述べた通り、日本語には建築的、対比的の機械韻律が殆んどなく、その点外国語に比し甚だ貧弱^{はなは}であるけれども、一種特別なる柔軟自由の韻律があり、母音、子音の不規則な——と言うよりも非機械的な配列から、頭韻や脚韻やの自由押韻を構成して、特殊な美しい音律を調べるのである。この点に於て歌は最上の発達を遂^とげてるので、特にその代表的な作に就いて例解し、韻律を分解して押韻図式を示して置いた。本書によって歌の韻律構成を知り、併^あせて日本語韻文の概念を知る読者があれ

ば、著者にとっても一つの大きな悦びである。

卷末の「総論」には、万葉以下新古今に至るまでの、各歌集の概要批判を述べ、併せて歌の変遷を比較対論した。著者はもとより専門の歌学者ではないからして、此所で自己の研究を論ずるのではなく、勿論また独創の新説を述べるのでもない。此所の総論に書いてることは、歌壇識者間の平凡な常識にすぎないだろう。主意は一般読者の為に、本文選歌の鑑賞を便しようとしたにある。故に本書の一般読者は、最初に先ず巻尾の総論——即ち各歌集の概説紹介を——一読し、次に各集の選歌について味読されたい。おそらくはずと理解を助けるだろう。

集中二三の歌について、時に私見による改作をあえてした。著者は信ずるところがあつたのであるが、別の見地から冒瀆ぼうとくと呼ばれても仕方がない。但し責任を明記する為、一々原歌を示して置いた。

歌の作者は、一々に就いて掲げる必要を認めないので、特に注目すべき重要な人物と、何等かの点で批判的興味のある作家だけを、評釈と共に註記して置いた。作者不明（読み人知らず）の分についても、一々断ることを止めた。

戀愛名歌集